

「遊びの都市」における
住教育に関する研究
—「こどものまち」と「Mini-München」の
日独比較を通して—

研究代表者：花輪 由樹

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

博士後期課程学生)

研究成果論文

1. 研究背景と目的

1.1 研究動機

人々が主体的に行動するのには、「自ら（意識的に）」もしくは「自ずから（無意識的に）」動き出してしまうような〈きっかけ〉が存在し、それを引出す役目はファシリテーターと呼ばれる。ファシリテーターは人と場所との対話が強く望まれるまちづくりには欠かせない存在であり、普通は、人間がその役目を担うものとされているが、本研究ではそれが環境自体に組み込まれているという仮説をもつ。そして、人々が思わず関わり続けてしまうような場所のあり方を、「遊びの都市」の事例から探ることで、そこに住教育としての可能性を探ろうと試みた。

1.2 「遊びの都市」とは

「遊びの都市」は、1979年にドイツのミュンヘンで始まって以来、近年日本で急速に広がっており、子どもが仮想都市を創って遊ぶ地域行事として知られている。ミュンヘンでは「Spielstadt Mini-München（遊びの都市 ミニ・ミュンヘン）」と呼ばれ、日本では「こどものまち」と呼ばれている。

日本には1997年に高知県香北町に伝わった。その後2002年に千葉県佐倉市で「ミニさくら」が継続実施されるようになると、これをモデルとしたイベントが、各地で開かれていった（表1参照）。主催は、NPOや行政、主婦の集まりなどが主である。

「こどものまち」は数日間行われる。一方「Mini-München」では、夏休みの1ヵ月間開催される。両者どちらも、子ども達は仮想都市内にある店で仕事をして働き、買い物等をして遊ぶことが共通している。その他、市長選挙への参加や納税の仕組みもあり、単なるお店屋さんごっこや職業体験とは一味違う、遊びの中で社会を学ぶ機会が備わっていると言われる。

また、各店の仕事内容や、「まち」の仕組み、ルールに関して、子ども達自身が集まって決める機会もある。この機会は、日独において異なる特徴がある。とりわけ「Mini-München」では、1ヵ月の開催期間中に「まち」づくりが展開し、一方「こどものまち」では、準備段階が「まち」づくりの機会となることが、本研究者のこれまでの調査で分かっている。

しかしながら、具体的にどのような「まち」づくりが子ども達だけで考えられ展開していくのかは、これまで明らかにされてこなかった。

1.3 研究目的

本研究は、「遊びの都市」が子ども達にとって自分達の「まち」をよりよくしようと考える機会であることに注目し、この「よりよくしよう」とする状況が、①日本とドイツの「遊びの都市」では具体的にどのように存在するのか、②そして子ども達の行動を促す〈きっかけ〉が「遊びの都市」の環境の中にどのように組み込まれているのか、③そしてこの環境が今日の住教育に示唆するものとは何かを考察することを目的とした。

2. 研究方法

2.1 各章の概要

本研究では、住教育の視点から「遊びの都市」における子どもの「まち」づくりの参与状況を

探るため、まずは住教育の論考整理と本研究の位置づけを行い（第4章）、次に「遊びの都市」の準備と当日の状況を明らかにし（第5章）、住教育としての考察を行った（第6章）。

表1 日本で継続実施されている「こどものまち」一覧













	開催初年	名称	開催地	主催団体
1	2002	仙台こどものまち	宮城県仙台市	子ども未来フォーラム
2	2002	ミニさくら	千葉県佐倉市	NPO法人子どものまち
3	2003	ミニいちかわ	千葉県市川市	NPO法人市川子ども文化フロンティア
4	2003	ピンポン横丁	愛知県名古屋	NPO法人こどもNPO
5	2004	羽島子ども町	岐阜県羽島市	江古良コミュニティセンター
6	2004	こども四日市	三重県四日市市	こども四日市プロジェクト、四日市市
7	2005	キッズハッピーよこ町	東京都台東区	台東区立池之端児童館
8	2005	ミニたまゆり	神奈川県川崎市	田園調布学園大学
9	2006	ミニさっぽろ	北海道札幌市	ミニさっぽろ実行委員会
10	2006	だがねランド	愛知県名古屋	財団法人名古屋都市センター
11	2006	チャキッズタウン京都	京都府京都市	京都市/（財）京都市コースサービス協会
12	2007	ピノキオマルシェ	千葉県柏市	ピノキオプロジェクト実行委員会
13	2007	むさしのミニタウン	神奈川県武蔵野市	子どもの参画をすすめる会
14	2007	ミニたちかわ	東京都立川市	NPO法人こどもと文化協議会・ブラッツ
15	2007	ミニヨコハマシティ	神奈川県横浜市	NPO法人ミニシティ・プラス
16	2007	ながみん横丁	愛知県岡崎市	NPO法人岡崎まち育てセンター・りた
17	2007	キッズタウンなかむら	愛知県名古屋	NPO法人子ども&まちネット、子ども会ボランティア竹の子サークル
18	2007	ミニ大阪	大阪府大阪市	NPO法人こども盆裁
19	2007	ミニたからづか	兵庫県宝塚市	ミニたからづか実行委員会
20	2008	ミニまつぶし	埼玉県松伏市	松伏町文化のまちづくり実行委員会
21	2008	ミニそうか	埼玉県草加市	草加ふささら祭り実行委員会
22	2008	キッズタウンいたばし	東京都板橋区	板橋区教育委員会 生涯学習課 大原社会教育会館
23	2008	ミニまほろば	奈良県橿原市	ミニまほろば実行委員会
24	2008	ミニ☆大阪	大阪府堺市	ミニ☆大阪プロジェクト
25	2008	こどものまち高砂	兵庫県高砂市	こどものまち「高砂」実行委員会/特定非営利活動法人高砂キッズスペース/高砂市レクリエーション協会ほか
26	2009	イツアスモールCBT	千葉県千葉市	千葉市（「子どもの力」フォーラム）
27	2009	未来ほろろ	富山県富山市	未来ほろろ実行委員会（富山市 中心市街地活性化推進課）
28	2009	とさつ子タウン	高知県高知市	とさつ子タウン実行委員会
29	2010	ミニ★シティ	大阪府大阪市	應徳院寺町倶楽部

『こどもがまちをつくる』（萌文社、2010）より筆者加筆。
色塗り部分は本研究で訪れた調査地。

2.2 「遊びの都市」の3分類による実態調査

日独では準備段階における子どもの参与状況が大きく異なるため、以下の3パターンに分けて調査を行った。

表2 準備状況と開催日数に基づく「遊びの都市」の3分類

「遊びの都市」の3分類	準備段階の状況 (子ども or 大人による「まち」の企画)	イベント当日の開催日数				
		1日	2日	3日	…	1ヵ月
①日本型 子どもが事前に「こども会議」を開き「まち」を企画し準備する。	 調査1			 調査3	…	×
②ミュンヘン型 大人が前日までに「まち」を企画し準備する。	 調査2				…	×
③Mini-München 大人が前日までに「まち」を企画し準備する。	 調査4				…	

そしてこれらの違いが子どもの「まち」づくり環境にどのような違いを生み出すのかを下記の〈調査1～4〉の視点から探った。

〈調査1〉: 「日本型」では、どんな子ども会議が開かれ子どもが「まち」を企画するか。

〈調査2〉: 「Mini-München」と「ミュンヘン型」は、大人がどんな「まち」を企画するか。

〈調査3〉: 「日本型」と「ミュンヘン型」は、数日間で子どもがどんな「まち」を展開するか。

〈調査4〉: 「Mini-München」では、1ヵ月間で子どもがどんな「まち」を展開するか。

2.3 調査地における開催概要

表2の3分類より「遊びの都市」の調査を行ったが、①日本型については、準備段階を中心に調査する関係で本研究者の居住地である関西地域とした。2012年度に実施され、かつ調査が可能であった「遊びの都市」の調査地とその開催概要は以下のとおりである。

3. 既往研究にみる「遊びの都市」

既往研究において「遊びの都市」は、建築、教育、政策などの方面から注目されている。例えば木下¹による子どもの参画に関する日・独の政策比較の視点や、小田²や東³による主体的な消費者教育の意義を見出したもの、鈴木⁴⁵による「まちづくりリテラシー」

表3 「遊びの都市」3分類ごと各地域の開催概要

	名称	開催地	主催	2012年度の開催期間	開催場所	定員	対象年齢	参加費	事前予約の有無
①日本型	ミニ京都	京都市	ミニ京都実行委員会	11月24, 25日 (10:00~16:00)	西京区役所 洛西支所 2階	80名	小学校1年生~18歳	1日500円	定員割していれば当日参加可能
	ミニ☆大阪	堺市	ミニ☆大阪プロジェクト実行委員会	3月30,31日 (10:00~16:00)	榎文化会館	100名	小中学生	2日で1000円	必要
	こどものまち高砂	高砂市	(特非)高砂キッズ・スペース	11月17, 18日 (8:00~18:00/2日目は16:00迄)	高砂市青年の家	120名	小学生	1日1000円、17日のナイトバスは500円	必要
②ミュンヘン型	仙台こどものまち	仙台市	子ども未来フォーラム実行委員会	10月7日 (9:00~16:00)	みどりの森幼稚園	200名	小学生	1日500円	必要
	未来ぼ〜る	富山市	未来ぼ〜る実行委員会	11月24, 25日 (13:00~17:00)	中央通り、総曲輪通り、西町などの商店街	特に定員はないが30名参加	小学校5,6年生	無料	事前登録はあるが当日参加可能
	とさつ子タウン	高知市	とさつ子タウン実行委員会/認定NPO法人NPO高知市民会議/高知市民活動サポートセンター	9月8日, 9日 (11:00~17:30)	りょうまスタジアム(競輪場)	300名	小学校4年生~中学校3年生	2日で1000円	必要
③Mini-München	ドイツ連邦共和国バイエルン州	NPO文化と遊び空間(Kultur & Spielraum)	7月31日~8月18日の火曜日~土曜日 (11:00~18:00)	オリンピック公園スポーツアリーナ	定員はないが1日に2000人~2500人ほど来訪。	7歳~15歳	無料	不要	

習得の可能性を示唆したものがある。また「ミニ・ミュンヘン」の概要紹介として、内藤^{6, 7, 8}や卯月^{9, 10, 11}によるものがある。さらに全国各地の「こどものまち」の情報を初めて網羅的に収集した著書として『こどもがまちをつくる』（萌文社, 2010）などもある。

このような中で本研究は、住教育の視点から子どもが仮想都市を創ることの意義をみていくが、既往研究で住教育との関連から述べられているものには、鈴木の研究がある。ここでは名古屋の「だがねランド」が対象とされ、子ども達の生活の舞台において「まちづくりリテラシー」が育つ可能性があることと示されている。しかしその「まちづくりリテラシー」が、具体的にどのような環境で育まれるのかまでは明らかにされていない。そこで本研究は、住教育という視点から、自分の住む場所への「まちづくりリテラシー」を育むことを可能にする環境が「遊びの都市」の中にどのように創られるのかに注目していく。

4. 住教育とは何か

住教育には、狭義と広義の意味がある。狭義では、家政学や家庭科教育学の住居学領域の教育のことを指す。広義では、住まい（住居を含む環境全般）に関する教育のことを指す。以下では本研究で使用する住教育の語を明らかにするため、住教育のはじまりと変遷（4.1）、類義語からみる住教育の位置づけ（4.2）より、本研究における住教育の定義（4.3）を行い、その視点から本研究の比較対象国であるドイツの住教育（4.4）についても見ていく。

4.1 住教育のはじまりと変遷

1960年代に奈良女子大学住居学研究会で、家庭科の学習分野である住居をどのように教えるかという問題が起り、そこから住教育の用語がキーワードとして注目されはじめ

た¹²。家庭科の住居は、家政学の住居学に基盤があり、これは「人間らしい暮らし」を実現する生活者の視点から住居のあり方を追求する学問である¹³。しかしこの住教育という問題は、家政学や家庭科教育だけの問題ではなく、1980年代には建築学や都市計画学においても盛んに研究会のテーマとして語られ、人と住まいのあり方を考える上で重要なキーワードとなっていく¹⁴。そしてその対象は住居だけに限らず、「住環境教育」として、小澤や妹尾らによって環境教育からの流れを組むコミュニティや都市などの広がりを持つような把握がなされていった¹⁵。近年は、このような広い視点から学校内外の住教育の実践例が多数報告されている¹⁶。

現在の住教育は、小澤や妹尾らによってその不十分さが指摘されており、学校教育では、家庭科や社会科、生活科で行われることになっているが、時間不足や教材の不十分さ、指導力不足などによりバランスよく実施されていないという。バランスとは住生活についての知識だけでなく、評価や判断、主体的に行動できる力を養うことを指し、これが万遍なく行われる時間と教材と教師の指導力の充実が、現時点での住教育の理想とされている。一方、学校外の地域活動では、参加型まちづくりのワークショップなどが盛んに行われ合意形成の方法を学ぶ機会があり、これを学校教育に取り入れていくことが望まれているようだ。また学校外の活動は、企画は大人が中心になることが多く、企画段階から子どもが参加する例は珍しいとされているのが現状である¹⁷。

したがって今後は、学校教育におけるバランスのよい住教育の実施と共に、学校外においても企画段階から子どもが関われるまちづくりの充実が求められているといえる。

4.2 類義語からみる住教育の位置づけ

前項において住教育とは、住居を含むコミュニティや都市にまで広がる概念とされ、学習者の行動変容が期待された教育でもあることが明らかになった。このような住教育に似た類義語として、以下が挙げられる。

- ①「住まい・まち学習」¹⁸：人が豊かに生きていくための横断的・越境的な学び
- ②「地域の住まい学習」¹⁹：気候・風土・歴史により住まいや町並み・住生活が異なる理解
- ③「環境学習」²⁰：生命を意識した学習
- ④「住環境教育」²¹：現代の住生活への知識・評価・判断・主体的行動力を養う
- ⑤「地球市民を育む学習」²²：グローバルな多文化社会における人権問題への向き合い方
- ⑥「シティズンシップ教育」²³：政治的な「市民」の役割を知る
- ⑦「郷土学習」²⁴：身近な生活の場を学ぶ

これらは主に住む場所や対象に広がりのある学習といえ、その中でも⑦⑧は特に、住む場所への意識や態度を強調した用語である。また住教育では「住学習」と表現することは

少ないが、これらの多くの類義語では、「学習」という用語が多用されていることにも注目したい。このような住まいに関する学習は、従来の「教育」ではない、より強い意味が込められた主体的な学びが期待されていることがうかがえる。

住教育においても、研究者の中には、他者からの押し付けの響きが強い「教育」を避けて、ひとりひとりの内発性や創意性を重視する「学習」の用語の使用を掲げる者もいる²⁵。しかし「住学習」ではなく「住教育」と掲げるのには理由があり、それは住まいにおける生活の主体者を育成するだけでなく、住まいの中に伝えたい教育的メッセージが強いことがうかがえ、この両者が期待されているのが住教育であると考えられる。

4.3 本研究における住教育の位置づけ

前項までの住教育の変遷や類義語によると、住教育が住宅からはじまり地域や都市、地球までに広がる概念であり、そこには学習者の主体性を促すとともに、住まいの教育的メッセージを知らせるものであることが読み取れた。そこで本研究では、子ども達が「遊びの都市」において、自分達の遊び場をよりよく変革していく状況がどのように設定されているかということと、それが「都市」という場を理解させる教育としてどのように機能しているかを探ることを、本研究の住教育の視点としたい。

また住教育で課題とされていることには、学校教育の充実、学校外における企画段階から子どもが関われるまちづくりの充実があった。本研究では、「遊びの都市」が「子どもの主体性を尊重しながら子どもの都市づくりをサポートする」ことを目指している点が、子どもの住まいに対する主体的な態度を育て、またそれをサポートする大人側にも子どもを主体的に行動させる技を取得させることができ、これは現在の日本が抱える住教育の充実と、住教育者の育成を図る取り組みとして注目できるだろう。

したがって本研究ではその内実を知るために、「遊びの都市」を通じて子どもがどのように主体的になり、大人側もどのような姿勢をもつようになる可能性があるかを明らかにする必要があると考える。また学校外の住教育は、近年盛んに取り組まれているが、準備段階からの子どもの参加は珍しいとされることから、準備の段階から子ども達自身で遊びの舞台を創っていく日本の「こどものまち」の環境がどのようなものであるかについても、住教育の重要なポイントとして注目し、これらは第6章の考察で考えていきたい。

4.4 ドイツの住教育

本研究の住教育の視点が明らかになったところで、比較対象国となるドイツの教育事情を見ておきたい。また日本の住教育の起点となった家庭科が、ドイツでは明確に存在しないことから、ドイツの「遊びの都市」と「住教育」に関係のありそうな「職業教育」「民

主的市民性教育」についても以下に触れておきたい。

4.4.1 ドイツの教育事情

図1はドイツの教育制度を示したもののだが、日本との比較において2つの特徴がうかがえる。

まず1つ目は、6歳から基礎学校(Grundschule)に4年間通った後、10歳の小学校4年生時点で将来の進路がほぼ決定してしまうことである。その後2年の猶予期間を経て主に3コースに分かれる。それは、①大学進学を目指す「ギムナジウム(Gymnasium)」のコース(8

年制または9年制)、②職業教育学校への進学や中級の職に就くことを目指す「実科学学校(Realschule)」のコース(6年制)、③卒業後に就職し職業訓練を受けることを目指す「幹学校(Hauptschule)」のコース(5年制)がある²⁶。またこのような早期に進路決定してしまう状況を回避し、上記3つのコースの融合形態とされる「総合制学校」のコースなども近年出現してきた。

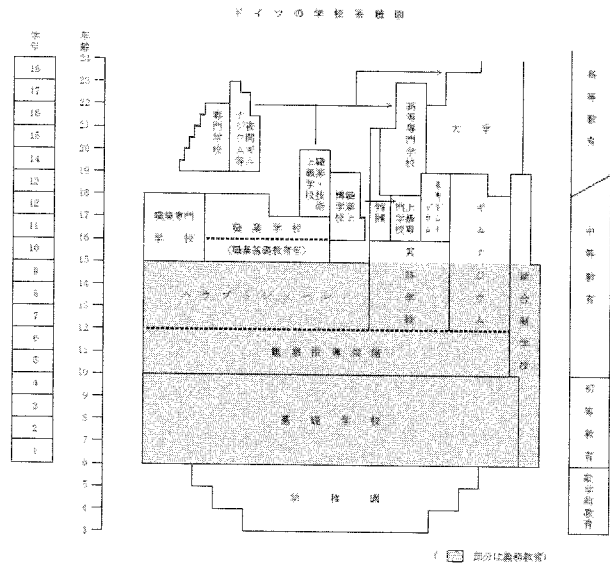
2つ目の特徴として、ドイツの教育への権限は国よりも州の方が強いことがあげられる。ドイツ連邦共和国は16州から成るが、初等中等教育に関しては各州の文部省が権限を持ち、一方、高等教育や学術研究などに関しては連邦政府の教育研究省が権限を持つ仕組みとなっている。義務教育年限は多くの州で9年(6歳~15歳)とされている²⁷。

4.4.2 ドイツの住居学²⁸

日本の住居教育問題が浮上したのは家庭科教育の住居領域からであり、その親科学となる家政学の住居学は主に建築学の研究者によって成り立っていたという背景がある。一方でドイツでは家政学が「家庭・領地管理と農業技術」という始まりをもち、多くが農学部に所属しながらも経済学などの理論を重視したカリキュラムとなっていることから、日本の家政学が重視していた実践や実学への方向性は稀薄であった。

しかし戦後の大学改革後には、経済を中心とした家政学から、食を中心とした実践科学としてエコトロフロジー(Oekotrophologie)が提唱されようになった。住居学についていえば、ミュンスター大学では社会科学系の住居生態学とされ、日本では住まい方や住

図1 ドイツの教育制度



出典：文部科学省『教育指標の国際比較』平成24年3月

様式、平面構成などの住生活の実態が研究対象とされてきたのに対し、ドイツの住居学の研究では装備・設備の機能や性能に関する合理的な生活実践が目指されていたようだ。そしてそこには環境保護や省エネルギーの意識から住居の設備を考える姿勢があり、それはヨーロッパ全体で先進的に取り組まれてきた環境教育の影響を大いに受けていることがうかがえる。

4.4.3 職業教育²⁹

ドイツはデュアルシステムと呼ばれる職業教育が社会的に確立されている。それは技術だけでなく知識を学ぶ場として、企業と学校がその役割を担うよう職業教育法（1969～）により定められ実施されている。

1964年のドイツ教育制度委員会の意見書によるとデュアルシステムとは「専門的知識学習と専門的技術訓練を並行して、二次元的に企業と学校で行うシステムである」と定義されている。対象は義務教育後の職業訓練学校等に通う16～19歳の生徒で、数年間にわたり週に数回企業で実習を行うことになっている。そしてこれは、中世以来の師弟による技と知識の伝承の仕方（マイスター制度）を、企業と学校において技と知識を伝承可能にする職業教育の仕組み（1969年職業教育法）に発展させていった。これは伝統と調和した職業形態として、日本をはじめ世界各国で注目を浴びている。

グライネルト（Wolf-Dietrich Greinert）によると、ドイツのデュアルシステムは、①中世以来のドイツ手工業におけるマイスター制度からはじまり（基礎段階：1870-1920）、②ワイマール憲法時には近代化や工業化の中で大量生産に向けた新しい社会構造システムとその人材育成が求められ（確立段階：1920～1970）、③職業訓練課程を学校と企業に求める職業教育法（1969～）により制度として確立した（完成段階：1970年以降）という。

4.4.4 民主的市民性教育

(1) 学校教育の民主的市民性教育^{30,31}

現在、市民性教育は各国の教育界のキーワードとなっており、これはグローバリゼーションに対応するものである。普通は「市民性教育」と言われるが、ドイツの政治教育は「民主的市民性教育」（education for democratic citizenship）と言われ、この democratic がつけられているのには、ヴァイマル共和国やナチズム、東西ドイツの分断を経てきた歴史が刻まれている。戦後のドイツは、ヴァイマル共和国が達成できなかった民主主義による国家建設を達成した。

政治教育が目指すものは、「個々の市民による政治的能力の獲得を通じて民主主義を確固たるものとする」とである。例えばノルトライン・ヴェストファーレン州では、政治教育が1つの独立した教科となっており、ここでは政治的な行動力と技能を育成することを目指している。そのため、州には各地方自治体毎に子ども議会が存在し、子ども達が自転車の

運転や遊び場、児童館などの問題に関して意見を述べることで、実際の政策に反映されるなど、学校教育だけでなく社会全体で子どもの意見を尊重しようとする努力がみられる。

学校教育は普通であれば州毎に制定されるが、政治教育に関してはナショナルスタンダードが掲げられるほど、州を越えた一定の共通性をもつ。それほど「民主的市民性教育」が重要なものとされていることがうかがえる。そして、このように政治教育は社会全体で支援される状況にあることから、政治教育が多くの教育学者にとって研究テーマの中心となっている場合が多いという。

(2) ミュンヘン市における子どもフォーラム³²

上にみたように、ドイツでは学校教育以外にも「民主的市民性教育」が各市町村の子ども議会にみることができる。ミュンヘン市では子どもフォーラムと呼ばれ、ここに関わる大人は「遊びの都市 Mini-München」の市民育成にも関わっている。

ミュンヘン市における子どもフォーラムは、1989年に始まったもので、4月と11月の年2回、子ども達が本物の市庁舎の中にある議会場に集まり、自分達の住む場所に対する提案を行っていく。テーマは遊び場や交通、学校のこと、公共に関すること等が話し合われる。このフォーラムを開くにあたってミュンヘンでは、「遊びの都市 Mini-München」を主催するNPOが、市からの別の委託プログラムとして、市内にある400校向けに「民主主義を学ぶ授業」のリクエストを募り、応募のあった中から1つの学校で2クラスを、10校分回り、2時間のワークショップを実施していく。これはフォーラム開催の2～3週間前に行われる。

なおミュンヘン市には全ての部局に「子ども担当」がおり、彼らは子どもに関する事業を横つなぎしていく役割をもつ。したがって子どもフォーラムで可決された内容は、「子ども担当」との間で実現が約束されるが、もし実現不可能ならば3ヶ月以内にその旨を伝える義務がある。

これらのワークショップやフォーラムの先導にたつNPOのM氏は、「遊びの都市 Mini-München」においても市役所ブースと市民集会のブースを担当しており、実生活においても「遊びの都市」においても、子どもの民主主義的な参画をサポートしている。また本研究者のM氏へのインタビュー調査によると、子どもフォーラムに関わっている子の多くが「遊びの都市 Mini-München」にも参加していることが明らかになった。そして中には、子どもフォーラムで飛行場に図書館を創ろうと提案し実現させた子が、「遊びの都市 Mini-München」においても市長として活躍し、政策をリードする様子がみられた。これは普段から実社会にある子どもフォーラムで鍛えられていた力が、「遊びの都市」という新たな都市の場で再び発揮されていく流れが存在していることが分かる。

4.4.5 ドイツの住教育とは

以上みてきたように、ドイツには家政学や住居学が存在するものの、家庭科教育の存在が明確には存在しないことから、日本的な狭義の住居領域に関する住教育は行われていないことがうかがえる。むしろ環境教育の流れに乗っていくものであり、また「職業教育」や「民主的市民性教育」のような、広義の住教育があることも確認できた。

したがって、以下でドイツの「遊びの都市」を分析する際には、日本のような単線型教育ではなく、複線型教育であるために子ども達の進路が小学校卒業段階で決定してしまう社会システムの中で職業教育が充実しており、さらに民主的市民性教育も社会全体で盛んに整えられている環境にあることを念頭においておきたい。

5. 「遊びの都市」の準備段階と当日の展開

前項で明らかになった本研究における住教育の視点とは、子どもが住まいに対してどのように主体的になる住教育環境があるかを明らかにするとともに、大人側にも子どもの主体性を促すことで住教育者としての姿勢がどのように身に付くのかを考えていくことである。これをふまえて、日独の「遊びの都市」における開催概要（5.1）、調査1～4による準備段階と当日の「まち」の展開をまとめた（5.2～5.5）。

5.1 日独の「遊びの都市」の概要

①日本型	●「ミニ京都」
	<p>* 1 開催のきっかけ：2011年より開催。</p> <p>ミニ京都は、2011年に全国の「こどものまち」主催者会議を開催する際に、京都の中にある子育て支援団体や子どもと遊ぶ活動を行うNPOや行政の人々が集まって、京都に新たに「こどものまち」をつくろうと結成された団体である。しかしミニ京都は、チャキッズタウンからの流れをもつ。チャキッズタウンは下京区青少年活動センターで京都市ユースサービス協会の活動の一環で、立命館大学の学生を中心に子どもと関わる活動として、2006年より開催されてきた「こどものまち」であり、中心メンバーとして「こどものまち」づくりをリードするY氏やその他多くの学生が、チャキッズタウンの経験者として「ミニ京都」に関わる。</p> <p>今回は洛西地域の人々が子どもの力を借りて何かイベントをしたいけれど具体的な手法を模索している中に、他地域で実践をしてきた子ども達とまちづくりを行う「ミニ京都」がもう少し地域とつながれないかとの方向性を持ち、互いが協力しあう体制ができた。</p>
	<p>* 2 主催団体：</p> <p>チャキッズ時代に関わっていた学生メンバーや、その流れをくむ立命館大学の学生、NPOや行政、洛西地域の住民の人が関わる。今回中心になるのはチャキッズ経験者のY氏だが、サポートするのは学生スタッフであり、その周りには地域の洛西ニュータウン創生推進委員会子どもチームやNPOの子どもセンターが関わっている。</p>
	<p>* 3 開催目的：</p> <p>子ども達が自分達で「まち」を作り、働き遊ぶ中で、成功や失敗をしながら、ひとりの市民として自由に自分のしたいことにチャレンジしていけることを目指す。また今回は洛西地域での初めての試みとなるため、京都の「こどものまち」のシステムを、色々な地域で実施するための第一歩として、洛西の住民の人々と協力しながら創る取り組みである。</p>

	<p>●「ミニ☆大阪」</p> <p>* 1 開催のきっかけ：2008年より開催。</p> <p>大阪の児童館職員であったF氏が退職する際に、記念イベントとして、今までやりたいたと考えていた「ミニ・ミュンヘン」を模した取り組みを試み、児童館のイベントとして開催された。1回きりの予定であったが、その後も子ども達が継続実施を願ったため、次年度も開催する方向に動いた。したがってここに関わる多くの人々が、児童館職員や児童館で育った子どもでもある。</p> <p>* 2 主催団体：</p> <p>児童館イベントからの流れを組む「ミニ☆大阪」のための集まりであるが、「ミニ☆大阪」以外にも、子ども塾や夏休みのイベントなど年間を通した活動が行われており、その中の1つに「ミニ☆大阪」がある。「ミニ☆大阪」では、大学生が実行委員長となり、まちづくりを進めていく。その際、実行委員である小中高大学生と共に意見を出しながら、まちを準備していくが、そのアイデアは小学生によって生み出されることに期待し、中高大学生は聞き役にまわりながら、小学生の考えを引き出すことをサポートしていく。</p> <p>* 3 開催目的：</p> <p>社会の仕組みを学ぶというよりも、夢中で楽しむ体験や自分が主役となって活躍したり、アイデアを実現してみることで自分で何かを変えていける体験ができることを大切にしている。そのため、やりたい仕事は好きな時間だけすることができ、失敗が許されたり、ルールを自分達で変えられたり、トラブルも子ども達だけで解決していけるようにサポートしていくことを目指している。</p>
	<p>●「こどものまち高砂」</p> <p>* 1 開催のきっかけ：2008年より開催。</p> <p>高砂市に学童保育所ができて25周年を記念したイベントとして、札幌などの全国のこどものまちを見に行った職員が、実現させようと企画を提案した。</p> <p>* 2 主催団体：</p> <p>主に学童の職員が子ども会議などを進めるが、近隣の高校生、大学生スタッフも関わり、彼らは当日スタッフとしてサポートする。</p> <p>* 3 開催目的：</p> <p>子どもが主人公となって、仕事や買い物などの様々な楽しい体験を行い、自分達だけで店をつくり展開させていけることを目指す。またプライダル都市である高砂らしさとして、ファッションショーも必ず行う。</p>
②ミュンヘン型	<p>●「仙台こどものまち」</p> <p>* 1 開催のきっかけ：2002年より開催。</p> <p>子どもが生き生きと育つ環境の実現を目指して、1997年に仙台市の子育て支援事業の一環として子ども未来フォーラムが結成され、2002年よりドイツの「Mini-München」を参考にした仙台独自の「こどものまち」を開催することとなった。しかし2007年からは市からの援助が打ち切られたため、自費運営とボランティアによる活動となった。</p> <p>* 2 主催団体：</p> <p>1997年から関わってきたメンバーが、子どもフォーラム実行委員として、現在も「仙台こどものまち」に携わっている。中心になっているのはY氏で、彼によってデザイン性を重視した「まち」が準備される。当日スタッフは子ども未来フォーラムのメンバーの他、短大生、「こどものまち」経験者の中高生などがいる。</p> <p>* 3 開催目的：</p> <p>本物がどのようなものかを大人が見せ、子ども達はそれを参考にしつつも、そこを超えていく作品を生み出すことが期待されている。1日の中で生産、消費、起業ができる時間が決まっていることから、メリハリのついた「まち」が展開される。</p>
	<p>●「未来ほ～ろ」</p> <p>* 1 開催のきっかけ：2009年より開催。</p> <p>前回までは中心市街地活性化のプログラムの一環として、富山市職員と商店主とが中心となり、近隣の高層マンション建設が進む中で商店街活性化を目指した取り組みであった。「こどものまち」のアイデア自体は、富山市職員が得た情報を提案したものである。</p>

	<p>* 2 主催団体： 商店街、富山大学の学生、富山市とのコラボであった。しかし今回は、「街 much まーち」という学生と商店街がタイアップした数々の企画を土台に成立しており、主に学生が中心となり、商店主や大学等がそれをサポートする形となっている。</p> <p>* 3 開催目的： 前回までは、商店街のまちなかを知ってもらい、店主と触れ合ってもらうことを目的としていた。そのため午前中は商店街ツアーを行い、午後から商店街の各店舗をつかって仕事を行い、働いたお金で商店街の商品を購入できる仕組みがあった。しかし今回は、これまでの仕事をして給料をもらうという仕組み抜きに、店や職業よりも、店主とつながることを重視したため、「こどものまち」の働いて買ひものをする要素はなくなった。そして商店街を舞台に作られたストーリーの中で、与えられたミッションをクリアする方向となった。</p> <p>●「とさっ子タウン」</p> <p>* 1 開催のきっかけ：2009年より開催。 もともと高知では市民の中でまちづくりを考える動きが活発であり、男女共同参画につづき、子ども条例を県の枠組みで作る取り組みが2004年頃から行われており、県単位で子どもの社会への関わり方を考える動きがあった。そのような中でU氏よりミニ・ミュンヘンの情報を得たことから、2008年より実行委員を立ち上げ1年間かけて形を練り上げた。そして2009年に第一回を開催し、その後も10年続けることを目標に開催し続けている。</p> <p>* 2 主催団体： 4つの学生ユニットが生まれ、その中に学生リーダーが存在し、そのユニットに学生以外の大人も関わる。当日は専門家が各ブースに来訪する。当日は子どもを楽しませ育むが、準備段階は大学生の育ちを応援するシステムとなっている。</p> <p>* 3 開催目的： プロが教える本物の技術と、高知らしさを知ってもらうことを目的としている。決して「こどものまち」を開催することが目的ではない。対象年齢は慈育と自育の境目である小学校4年生の10歳からの参加としており、子ども達が自ら育つサポートをすることを目指している。また学生の育ちも期待しており、これらの目的の下に10年間続けることを目標としている。</p>
③「Mini-München」	<p>* 1 開催のきっかけ：1979年より開催。 「Mini-München」の主催団体は、1968年より学生や親、ソーシャルワーカーなどが集まって、社会に対する「オルタナティブな（もうひとつの別な）可能性」を与える芸術教育（KEKS）の活動として始まった[i]。その後、1974年ゲルト・グリューナイズル氏らによって「ベタゴギッシェ・アクション（Pädagogische Aktion.V.）」が設立され、1979年の国際児童年を機に「遊びの都市（Spielstadt）」が開かれた。「Mini-München」という名称は、その時に子どもたちによって名づけられたものである[ii]。1985年の2回目の開催時にはイベント規模が拡大し、そのまま終了する予定であったが、子ども達の強い要望と実社会への積極的なアプローチにより、1986年以降も隔年で開催されるようになった[iii]。その後1990年に、ゲルト氏らによって「文化と遊ぶ空間（Kultur&Spielraum e.V.）」の団体が設立され、現在も「Mini-München」が企画され続けている[iv]。 「Mini-München」の教育哲学はルソーや『児童の世紀』、「ベンボスタ共和国」などにあり、ちょうど空中にあった考えがそれらを参考に集結して「Mini-München」という形になったが、そもそもの発端は子どものおかしな行動から大人がヒントを得たことに始まる。それは教師の言うとおりに行動することが求められる形式的な学校が主流な中で、野外遠足を企画した際に、遠足をするたびに他の学校からも600人近くの子供達が集まってくる現象が起きたため、今の学校システムがおかしいのではないかと思い、子ども達の自由意思による活動を開始した。</p> <p>* 2 主催団体： NPO文化と遊び空間の主催者によって企画がなされ、当日の各ブースは専門家スタッフと16歳以上の学生スタッフによって構成される。</p>

	<p>* 3開催目的：</p> <p>主催者は当初、夏のパカンスに行けない子どもたちも昼食を食べられるようなイベントとして開催してきた経緯があることから、貧富の差なく子ども達が平等に遊びに参画できるよう絶対に有料にしない方針を持っている[v]。またKEKSは、形式的で理念的な教育に対抗するもの[vi]を求めて芸術活動を行ってきたことから、「Mini-München」には遊びを通じた学びという融合理念が潜んでいる。このような中で「Mini-München」が目指していることは、子ども達が持っている独自のアイデアや知識を活かして、自分は自主的に行動できるのだということを知ってもらうことである。そのために「遊びの都市」という舞台を用意している。</p>
--	---

- [i] 木下勇『遊びと街のエコロジー』東京：丸善、1996年、197頁。
 [ii] 木下、卯月、みえ編著『こどもがまちをつくる』2010年、180頁。
 [iii] 木下勇、卯月盛夫、園田高明他、前掲論文、2007年、349-360頁。
 [iv] Gruneisl Gerd, Maschek-Gruneisl Margit 「『遊びの街、ミニ・ミュンヘン』は、形式にとられない学習の一例です」『こども環境学研究』3(1)、2007年4月、13頁。
 [v] 内藤裕子、前掲論文、2002年10月、78-82頁。
 [vi] 木下、前掲書、1996年、197頁。

5.2 ①「日本型」の準備段階における子ども会議（調査1）

名称	準備段階の人数	子ども会議の回数	子ども会議で行う内容	大人が決める「まち」のこと	子どもが決める「まち」のこと	
①日本型	ミニ京都	20名	3～4回	まちにあったらいいなと思うものを考え、模型を作り、ミニ京都に必要な店や建物を再度考え、実際に段ボールで作っていく。	ミニ京都に必要なブースとして、ハローワーク、銀行は必ず設置する。通貨の単位と、働く時間も予め決めておく。	ミニ京都のルール、各ブースのデザイン、ハローワークと銀行以外のブース案。
	ミニ☆大阪	15名	5回	どんな街にして、どんな店があったらよいかイメージし、まずはレストランに必要なレシビを作成した上で、他の仕事の内容やマニュアル作り、ブース作りを行う。	ふちょう、銀行、デパート、工房、ハローワークは誘導する形で設置する。1階がフードコートであるなど、ある程度の配置は決める。	レストランのメニューや、左記の大人が誘導したものの以外の仕事とその内容やマニュアル、ブース作り。
	こどものまち高砂	30名	9回	去年の振り返りから始まり、まちのイメージや店の中身を徐々に考えていき、オープニングやエンディング、通貨デザインについても詰めていく。また市長選挙も準備段階に行われる。	当日までに店づくりでしなかなければならぬことを予め決めておき、それを子ども達に示してクリアさせていく。銀行は設置するが、ハローワークは特に設置せず、仕事をもらうには各職場に自己申告という制度にしている。	5000円の予算で店づくりを準備していく。子ども会議に参加する子全員が、出店を行う。準備段階では、主に店でのサービス内容、値段、仕事のマニュアルなどを考えていく。

●ミニ京都

第1回：9月23日 11名の子どもが参加。

実際の地域の洛西ニュータウンの中を探検し、気になる場所や風景を写真に撮っていく。グループ毎に写真を紹介した後は、模造紙に「洛西のまちにあるもの」「まちに必要なもの」「まちにあったらいいなと思うもの」を書く。



第2回：10月14日 20名の子どもが参加。前回の模造紙に書いた内容を参考に「自分たちのまち」の模型を作る。1人1つ街の中にあつたらいいなと思うものを作り、配置してつないでいく。作成後はその作品を作った理由などを発表し合う。

第3回：11月4日 3名の子どもが参加。自分たちのつくるまちに必要な店や建物を考えていく。段ボールなどを使って実際に組み立てて想像してみる。またルールや給料の仕組みなどについても考える。

第4回：11月23日 20名の子どもが参加。前日の最終準備として、自分の作りたいお店のブースづくりを行っていく。最初は机やイス、段ボールなどが用意されているので、それらの材料を使って、各ブースに合った店を自分達なりに考えていく。主に看板づくりなどをする子どもが多いが、必要があると思えば店のマニュアル作りなども行う。

〈大人がすること〉

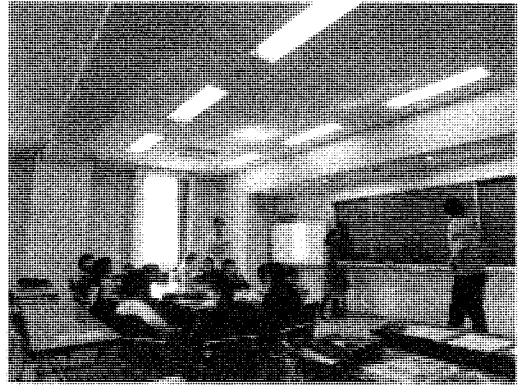
大学生やスタッフが間に入って子ども達の意見を聞き出したり、会議自体をリードしていく。第1回から第4回にかけて、前回のアイデアが直接次回の制作に結びつくわけではない。また第3回にほとんど出店するブースが決められたが、子どもの参加が少人数であったこともあり、その内容を決める際は大人スタッフによる誘導が大きかった。一方、第4回の前日の準備では、多くの子ども達が来たため、「まちをつくること」「働くこと」「役所は何をすところか」などを問いかけていき、初めて来た子どもも単に作業するだけでなく、意味を知った上で各ブースを作る作業に取りかかれるようにしていた。そして第4回の前日の作業準備になると、ブース作りのために、大人スタッフも子どもにアイデアを軽く提案していたり、一緒に各ブースを仕上げる作業を行っていた。

〈既に決まっていること〉

通貨：ドス。45分働くと200ドスもらえる。

●ミニ☆大阪

第1回：12月26日 街や職業のイメージ、やりたいこと、どんな店をしたいか考える。色々とアイデアが出るが、全体でイメージ統一をするのではなく、アイスブレイキング的な意味合いで行う。「楽しいまち」「しごとがいっぱいある街」等の意見が多かった。



第2回：1月5日 レストランのメニューで出したいものをあげ、レシピを考える。

第3回：2月17日 レストランのメニューで出す試作を行い、レシピを完成させる。今年のはたこ焼、焼きそば、ゼリー、クッキーを作成することに決定。

第4回：3月17日 店の仕事内容や、マニュアル、看板、仕事カードなどをつくる。

第5回：3月29日 4つのチームに分かれ、各チーム毎にブースに必要な物をそろえる。
(大人がすること)

基本的に子ども会議の日程は、みんなが集まれる日を設定して決める。職業については、大人側がこれはあった方がいいなと思うもの（ふちよう、銀行、デパート、工房、ハローワーク）は、「去年はどんなんあった？」と遠回しで聞いて、出してもらうように誘導している。スタッフの人数については働く人数+1人多めに設定するなど、子どもと一緒に考えたことの裏で、安全策などを考慮しておく。また子どもがやりたいと思ったことが叶えられるように、自主的に新聞などを作ってきた場合には、すぐにそれをコピーしてあげたりする。また具体的な作業を進める際にも、アイデアを深められるように、事前に質問用紙などを用意しておき、そこに書き込むことでマニュアルづくりなどのアイデアを出せるように工夫している。基本的には何をするのに子ども達に確認を取り、決定権は子ども達に与える。

(既に決まっていること)

1階と3階を使うが、借りている部屋の関係で1階がフードコートという決まりがある。

●こどものまち高砂

第1回：6月2日 去年の反省点・問題点の振り返りと今年やりたい店について。

第2回：6月16日 まちにあったらいいお店、オープニング、エンディングの内容。

第3回：7月7日 まちのテーマ決め。市長選挙と投票、開票、挨拶。通貨のデザイン案。



第4回：7月21日 通貨のデザイン決定。店舗数の増加について。オープニング、エンディングでやりたいことについて。

第5回：8月4日 自分の店を出す場所、マニュアル、営業許可書の作成。

第6回：9月1日 ナイトパスの提案。オープニング、エンディングについての話し合い。

第7回：10月6日 自分の店のPR方法。店毎に調理実習やマニュアルや看板作り。

第8回：10月27日 調理実習のやり直しと、ファッションショーでのモデル希望者への指導と衣装合わせ。

第9回：11月3日 本番に向けてのシミュレーションと、看板や飾りの制作。

〈大人がすること〉

大人スタッフが当日までに到達するべき「まち」の姿を想定しており、そこに近づくよう毎回子ども達に店を準備させていく。大人スタッフは、子どもが考えた内容やデザイン案を上手く繋げて全体の地図をつくってみせたり、店づくりの準備に足りないことを指摘していく。また子どもに当日の様子を想定させ、店での対応練習を行わせる時間もある。また今年から夜19時頃まで遊べるナイトパスの仕組みも作った。

〈既に決まっていること〉

毎年恒例のファッションショーを実施することや、通貨まっつんの名前は決められている。

5.3 ②「ミュンヘン型」と③「Mini-München」における大人の準備段階(調査2)

名 称		大人が準備しておくこと
②ミュンヘン型	仙台こどものまち	主催者であるY氏が中心となり、店での生産や消費活動に必要な商品や材料などの手配を行う。またどんな店を設置するかも決めておく。仙台のこどものまちは、特にデザインにこだわっており、各店の看板をはじめ、入国するためのパスポートや、プロ棋士になれる認定証、あそび神社のおみくじなど、細かい商品についてもこだわっている。
	未来ぼ〜ろ	学生が中心となり、遊びのストーリーを考えたり、商店街の人々との交渉、当日の子どものツアーの想定などを行う。
	とさっ子タウン	学生が中心となって5つのユニットが生まれ、各ユニット毎の活動が進められることで、当日の「まち」が創り上げられる。 ①営業ユニット（企業や団体に協賛金や協力を願いをする。）②こうてやユニット（商品開発を行い、運営資金の確保を担う。）③よるずユニット（デザイン関係、当日必要なものを調達する。）④くいしんぼユニット（当日のこどもと大人の昼食メニューの開発と手配を行う。）⑤だんどりユニット（全体のしくみやプログラムの企画、助成金等による資金確保を行う。）
③ Mini-München		Mini-München は前回からの変更があまりない。協賛企業や協力者となる専門家とのつながりによって多少ブース内容の変化があるが、ほとんど変わらない。また機材や建具などを保管しておく巨大倉庫が存在することからも、前回からの延長を前提としていることがうかがえる。NPOスタッフの大人5名ほどが中心になり企画を進め、他のミュンヘン市内の遊びのプログラムなどでも一緒になる Mini-München 参加者の子どもにも意見を聞いたり、ワークショップをしたりすることもある。

*②「ミュンヘン型」の多くは学生が企画し、その外側に学生以外の大人がいる構造がある。

5.4 ①「日本型」と②「ミュンヘン型」における、数日間の「まち」の展開(調査3)

名 称		「まち」の中に出 現する店などの ブース	予定されている プログラム	当日の子どもの主体的な「まち」づく り活動
①日本型	ミニ京都	大きく分けて、公共系、サービス系、飲食系の9ブースが存在した。	特になし	前日までに準備された「まち」の外観はとても簡素的でシンプルであったが、主に建設の仕事ブースが門やタワーをデザインしていき、1日目が終わる頃には線路ができていた。これらは子ども自身の発想で勝手に「まち」の様相が変化していった。また1日目の終わりには全体でもう少し「まち」を変えたいと思う点を話し合う時間を大人側がつくり、翌日の「まち」づくりを促していた。
	ミニ☆大阪	大きく分けて、公共系、サービス系、飲食系、製作系の15ブースが存在し、2日目からは午前と午後各20個ほどの起業ブースが開業した。	市長選挙、演劇	1日目は準備段階の会議で企画された店やブースであるのに対して、2日目は時間貸しで中央のスペースが起業ブースになる。ステージを使って演劇を披露するなど、「まち」を盛り上げる活動もみられた。

①日本型	こどものまち高砂	大きく分けて公共系、製作系、ゲーム系、飲食系、その他の20ブースが存在した。	学校、ファッションショー、エンディング、ナイトパスのイベント	事前に準備してきた子ども達は、自分の店をいかに盛り上げるかに集中し、まちづくりというよりは「みせづくり」に熱中する。館内で行われたため子どもがいる場所が分散していたが、放送の仕事が、イベント告知や店の宣伝などを行い、「まち」を盛り上げていた。市長も事前の子ども会議で決まっていたが、当日に特に「まち」づくりをするわけではなく、実際の高砂市長との挨拶に顔を出しただけで、自分の企画した店づくりに集中していた。
②ミュンヘン型	仙台こどものまち	大きく分けて公共系、ゲーム系、製作・作業系、飲食系の17ブースが存在し、午後からは20個ほどの起業ブースがみられた。	午前中は、「まち」の準備に関わる生産的な活動を、午後からは消費活動が可能になり、起業もできる。	特に「まち」を変えていこうとする動きや、子ども達が「まち」を変えていくような動きはみられない。起業についてはもともと予定されているものであるので、事前に販売する商品を創って、午後から販売活動を開始する。彼らの存在によって、午前と午後では「まち」の雰囲気や活気が大きく変わる。
	未来ぼ〜ろ	今回は「こどものまち」として実施しなかったため、ブースの出現は特になし。	商店街ツアー	今回は「こどものまち」として実施せず、ミッションを制覇するという形式であったので、「まち」を変革していこうとする動きは特にみられなかった。
	とさっ子タウン	大きく分けて公共系、製作・販売系、製作系、消費系、飲食系、ゲーム系等の約40ブースが存在し、その後15個の起業ブースも開業した。	1日目は市長選挙、第1回議会が行われ、2日目はとさっ子駅弁の試食、実際の副市長と、県懇談、第2回議会、建築コンペなどが行われる。	1日目の前半は、まず仕事をすることに集中する子どもが圧倒的に多いため、「まち」の大きな変化はみられない。1日目の後半からは、起業をする子どももいる。各ブースでは、市役所で市民へのアンケート調査をしたり、新聞や放送のブースで「まち」中で起きていることを紹介するための記事を作成するなど、仕事を通じた「まち」への意識がみられる。また広場の掲示板に「まち」への意見を書き込めるつぶやきボードがあり、「仕事が欲しい」「給料 up」などの要望が書かれるが、それが子ども達自身で「まち」を変革するところまでは直接つながっていかない。

①「日本型」:

子どもによる手作りのため、子ども目線で作られたポスターや店の仕組みなどが目立つ。各店やブースには、リーダーのような子ども達が存在し、彼らが中心になって店や「まち」を引っ張っていく状況がみられた。

②「ミュンヘン型」:

テーマパーク的で、子どもが吸収するのに精一杯である様子がみられる。何度も来ている子は全体像が分かっているので、起業など「まち」に新しいことを生み出していく。大人の伝えたい教育的メッセージが込められているが、子ども自身が新たに「まち」を創造

する余地があるかどうかポイントである。多くの「ミュンヘン型」の「まち」には、それが明確には存在していない。しかし中には「まち」への意見や要望を持っている子どももいることから、彼らの意見を活かす仕組みを、「まち」としてどのように設定するかが求められていく課題である。

5.5 ③「Mini-München」における、1ヵ月の「まち」の展開（調査4）

名称	③ Mini-München
「まち」の中に出現する店などのブース	協力団体の影響により毎年職業ブースに多少の変化があるものの、毎年ほぼ前回と同じ形で開催される。2012年度は、62ブースが用意されていた。各ブースは、1.仕事（お金をもらえる活動）、2.消費（お金を払う活動）、3.その他（お金を支払わない活動）の3パターンに分けることができた。62ブース全てに1.仕事（お金をもらう活動）のブースが存在し、2.消費（お金を払う活動）のブースは22ヶ所、3.その他（お金を払わない活動）のブースは28ヶ所存在していた。
予定されているプログラム	初日はオープニングセレモニー、最終日はフィナーレパレード等がある他に、ファッションショーやカラオケ大会、オリンピック、各職場でのイベント等があり、毎日様々なプログラムが用意されていることがプログラムに記載されている。その他に、毎日2回は映画が上映され、また毎週水曜日には市民集会有り、毎週木曜日には演説と市長選挙・議員選挙が行われる。
当日の子どもの主体的な「まち」づくり活動	<p>3週間にわたる日々の生産・消費活動の間に、街の中では様々なイベントが開催され、その中の1つに、毎週木曜日に行われる選挙がある。市長選挙の後に市議会議員選挙が行われ、市長1名・副市長1名・議員3名が選出される。第1週目の選挙までは、前回担当した子ども達が市長、副市長、議員の仕事を進める。第1週目の選挙には11人の候補者が演説を行った。その内容の多くが、①現在の街の問題点と②具体的な政策内容の提案で、主に1)「雇用問題」2)「食糧問題」3)「親が侵入してくる問題」などがあげられていた。</p> <p>1)「雇用問題」については約半数の候補者が述べており、雇用を増やすことでの具体的な対策として、「ディスコの開店」、「絵を描く」などが提案された。2)「食糧問題」については、「レストランで沢山の料理を作れるように」、「レストランの値段」についてがあげられた。3)「親が侵入してくる問題」については、「フリーゾーンの確保とそれを厳しく設定する必要性があげられた。</p> <p>そして実際に、1)雇用問題については、失業手当を出すことが行われ、2)食糧問題については、1人が1日に買えるパンの個数制限のルールが作られ、3)親のフリーゾーンについては、8月10日頃から図2に示すような明確なラインが職安の前に引かれ、そこに大人が入ると注意されるような状況ができあがった。</p> <p>この他に毎週水曜日には市民集会有り、ここでは集まった市民達が「まち」の問題点や改善点などを、市長、副市長、議員をステージ上において激しい議論が交わされる。そしてそこで可決された案は、議会メンバーによって実行に移される（図3）。</p>

「Mini-München」は、1日2000人以上の子ども達が集まるため、仕事をもらう職業安定所には何時間も並び続ける長蛇の列が絶えない。「Mini-München 2012」の開催2日目には朝9時から並ぶ子どももいた。基本的には、11時～12時までは職業安定所を通さずに、自分の働きたい所に直接行くことで、仕事をしたい旨を申し出て雇ってもらうことができる。しかしそこにも定員が設けられていることから、11時のオープン時点では熾烈な戦いがある。朝9時から並んで走っていったとしても定員に達してしまい、その仕事ができないこともある。このような状況から、消費活動をしたくても資金がなく、そして働く

仕事もなく、せっかく来たのに帰るしかない状況や、職安に並び続けるしかない状況が生まれる。しかし、仕事をして買い物をする生産・消費活動の他に、日々、映画上映や市民集会、市長選挙、イベントなども行われる。そして3週間という時間をかけて子ども達が徐々に自立し、それに伴い「まち」自体も発展していく状況がみられた。



図2 親の侵入を防ぐフリーゾーンの線

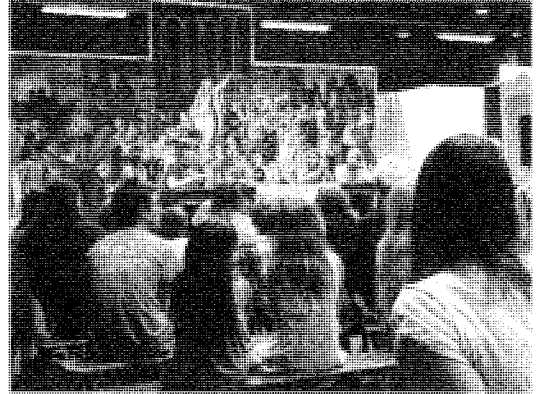


図3 市民集会の様子

5.5 小結—住教育の考察に向けた3分類のまとめ

本研究では、日本の「遊びの都市」を準備段階の子どもの参加有無によって①日本型と②ミュンヘン型に分けて調査を行ったが、ここで住教育的な考察をするにあたり注意したい点がある。それは、子どもが主体的にまちづくりに取り組む環境があるのは準備段階から子ども達が関われる①日本型であり、この準備段階に関わる子ども達こそが住教育的に素晴らしい可能性をもつ、という結論には至らないということである。なぜなら、①日本型で準備段階に参加できる子どもは少数であり、その少数の子ども達の参加をもって「遊びの都市」に住教育としての可能性があるとは言い難いからだ。

むしろ子ども達が準備段階に携わることで当日の「まち」がどのようなものになるかを考えることの方が重要で、そこに①日本型と②ミュンヘン型の比較をする意味があると考ええる。本研究ではそれが、子ども目線の子どもの配慮が当日の「まち」に準備されていくのが①日本型であることを明らかにした。そこには大人から見るとデザイン面や「まち」の運営面に頼りない点があるが、その不足分が住教育の可能性を秘めているといえる。それは②ミュンヘン型のように大人目線できめ細やかに配慮された「まち」ではなく、不足しているからこそ遊ぶ子ども自身に、「まちを変えたい」という想いを抱かせる余白があることを示す。これは特に「ミニ京都」の「まち」に強くみられた。この不足感・不満感を抱くことが主体的に「まち」を考えさせる始まりであり、「遊びの都市」における住教育のポイントであると考ええる。

それでは②ミュンヘン型のような大人が準備する「まち」は、子どもに不足感を抱かせ

る余白がなく住教育としての可能性がないのかと言えば、そうではない。そこには大人が子どもに楽しんでもらうために用意したテーマパーク的な世界があり、まず「まち」に来た子ども達はこの世界を遊びつくすことに没頭する状況がある。この「没頭させる状況」も、住み手の当事者意識とその後の変革意識を育てるためには重要なキーワードである。なぜなら第4章の住教育の定義にも明らかにしたように、住教育には伝えるべき教育的メッセージが存在するため、それを着実に伝えるためには、子ども自身がまず吸収しようとする態度を持っていることが望ましい。それを可能とするのが遊びによる「没頭」である。そしてその環境づくりを努力して行っている様子が、この②ミュンヘン型の「まち」にはうかがえる。

しかし先程あげた「まちを変えたい」という想いを抱かせる余白が、②ミュンヘン型は①日本型よりも弱い。なぜなら、大人によって配慮された「まち」は、多くがデザイン的に魅力で、子どもにとっては非の打ちどころのない楽しい場所として遊んでしまうのである。このまま全てが思い通りに運び、「楽しかった」と遊びつくすだけであれば、普通のテーマパークと変わらない。しかし「もっとこうしたい」という住教育的な態度を身につけるには、やはり③Mini-Münchenがもつ3週間という長期間の環境と、「もっとこうしたい」という想いを発信できる場所の確保と、「もっとこうしたい」と思ってしまうような悪い状況が必要である。実際の街であれば、まちづくりが必要なくスムーズに運営される街が理想であるかもしれないが、教育の場として「遊びの都市」を捉えるとなると、子ども達によって思わず「まち」づくりが生まれてしまうような仕掛けが必要であるといえる。

6. 住教育環境としての考察

本研究では日独の「遊びの都市」の「まち」づくりの状況を通じて、子ども達が自分の遊び場をよりよくしていく住教育の環境がどのように存在しているのかを探った。以下では、「遊びの都市」が住教育の環境に示唆を与えると思われる事柄を3つにまとめた。

(1) 子どもが主体的になる環境とは

まず「遊びの都市」において、子どもが「まち」づくりをするのは、「Mini-München」では開催期間中の1ヵ月に、日本の「こどものまち」では準備段階がその機会となっていることが、これまでの本研究者の調査で明らかになっていた。しかし今回の調査でさらに、日本の「こどものまち」は当日の「まち」の展開にも、「まち」づくりのチャンスが眠っていることが明らかになった。それは市長選挙演説であり、これを通じて子ども達が「まち」への不満や不足点を共有し、それを行動に変えていく機会となるであろうことが考えられた。それはドイツの「遊びの都市 Mini-München」にヒントがある。

日本の「まち」では、演説や選挙がコンパクトにいつの間にか行われてしまうが、ドイ

ツの「Mini-München」では毎週水曜日（市民集会）と木曜日（市長選挙と演説）に政治活動を行う日が設けられ、実際に多くの子ども達が市役所前の広場に自主的に集まってくる。第4章（4.4）にみた民主的的市民性教育や政治教育などの社会的背景も大きいと考えられるが、強制ではないのに選挙や演説に参加したくなるようなものが「Mini-München」という環境自体に仕掛けられている点に、本研究が住教育の視点から考える意味がある。子ども達が演説や選挙に向かう主体的な動きとは、おそらく「不快」を「快」に変える動きにある。「Mini-München」の主催者はそれをコンフリクトと表現したが、子ども達に押し寄せてくるハローワークに仕事がないとか、レストランに食べ物がないというようなコンフリクトを解決する手段として、市民集会や選挙の場が位置づけられているのである。

したがって日本においても、「まち」に何か問題が起こるということを恐れずに、それ自体が「まち」づくりの起爆剤となるように、当日の「まち」の状況を子ども達にとっては少し不足しているかなと思うぐらいに設定してみたり、もしくは極端に子ども達の動きを固定することで、「まち」にコンフリクトを起こさせ、それを解決したいという想いを抱かせる中で、演説の場が有効活用されていくことが望まれる。

つまり今日の住教育に示唆を与えることとしては、子ども達が主体的に考えざるをえないようなコンフリクトを与え、それを解決する手段と場所を提示しておくことがポイントであると考えられる。

（2）場所のあり方を考える学習的要素と教育的要素

本研究の調査を通じて、準備段階と当日とでは「まち」をつくる方向性が異なることが明らかになった。それは準備段階の「まち」づくりは、子ども達がほとんどゼロの状態からイメージを膨らます理想世界の「まち」創造であるのに対し、当日の「まち」づくりは、今ある状況を踏まえたよりよい「まち」の展開が目指されることに大きな違いがある。

ところで、第4章（4.3）にも明らかにした本研究における住教育の視点とは、自分達で自主的に考えるという学習的要素と、都市という場を伝える教育的要素が「遊びの都市」の中にどのように存在するのかという点であった。「遊びの都市」が各学界で注目される大きな要素は、前者の子ども達が自主的に自由に考えていくという点であるが、本研究ではあえて後者の教育的要素との絡みの中で「遊びの都市」が存在していることに注目したい。

なぜなら今後の住まいのあり方は、場所との関係性を絶ち切りながら生きようとした高度経済成長の時代とは違い、場所との対話の中で自分の生き方を選んでいく時代である。したがって住教育においては学習者の自主性を前提としつつも、それは完全な自由な発想

を支援するというよりは、その場所のこれまでのあり方を踏まえた発想が重要である。そうなると日本の「遊びの都市」における準備段階の「まち」づくりは、ゼロからの発想を良しとする学習的要素が強く、また当日の「まち」づくりは、今ある「まち」を踏まえた展開が求められる教育的要素が強いものといえる。

この教育的要素とは、「まち」自体にメッセージ的に存在するもので、子ども達に汲み取られることが期待されているものでもある。それは例えば「とさつ子タウン」（高知）などにみられるが、高知らしさを伝えたいという想いから、様々な高知の要素がブースづくりに取り入れられており、そういった高知とは何かというものを子ども達が身体で知っていくのである。また「Mini-München」においても、都市とは何か、市民とは何かを肌で感じて知ることができる要素が存在している。

このように教育的意図を環境に設定することで、住教育における態度のような直接知識的には教えがたいものを、伝承することができる。

(3) 住教育者を育てる環境

日独の「遊びの都市」は、大人（学生以外）、学生、子どもが関与して「まち」がつくられる構造にあった。子ども以外の人々は、子どもの主体性を確保するために、「口出し禁止」というルールを設けるなどして、子ども自身が行動できることを促す。そこには①子ども自身の主体性の成長と、②子ども以外の人々のサポーターとしての成長がある。

住教育者とは、今のところ②子ども以外の人々のサポーターのことを指し、子どもを主体的に行動させることがどういうことかを模索しながら、その技を身につけていく状況にある。その技を育てているのが「遊びの都市」であるといえる。「遊びの都市」は子どもも育てるが、子どもを主体に活動させる住教育者も育て得る環境なのである。近年では「遊びの都市」で育った子どもが、サポーター側として活躍していく流れが出始めており、「遊びの都市」の住教育者の継承も徐々に始まっているといえる。

ミュンヘンが持つ「遊びの都市」の30年の歴史に比べれば、日本はまだ始まったばかりの「都市」が多いが、ここで育った子どもやサポーターは、子どもを主体的に活動させるということを知っており、そういう技を持った人々がミュンヘン市に育ってきているということを示す。ミュンヘン市では「子どもに優しい都市」という方針のもとに2000年より政策が進められているが³³、「遊びの都市」を通じて「子どもに優しい都市」となるような土台が1979年より熟成されてきたことがうかがえる。今後日本でも各自治体が取り組む「子ども条例」や、ユニセフの「子どもの権利条約」の「参加の権利」の部分や、都市計画における住民参加のまちづくりにおける子どもの参加など、具体的な飛躍が求められる子どもの社会参加を支援する者として、この住教育者は注目されるべきである。しかしそれは専門家としての住教育者の存在ではなく、一般市民として誰もが身につける教養のり

テラシーとなっていくことが、今後の住教育に求められる方向性であり、そのような住教育環境の整備についてさらに考えられていく必要があるだろう。

【参考文献】

- 1 木下勇、卯月盛夫、園田高明（他）「日・独「子どもがつくる街」等の事例からみた子どもの参画の要件—ドイツ「ミニ・ミュンヘン」の背景と我が国の波及事例から—」『住宅総合研究財団研究論文集』（34）、2007年、349-360頁。
- 2 小田奈緒美、東珠実「日本型ミニ・ミュンヘンにおける消費者教育展開の可能性—消費者市民を育成する主体形成教育の観点から—」『消費者教育』30、2010年、13-23頁。
- 3 東珠実、小田奈緒美「ミニ・ミュンヘンにおける消費者教育—消費者市民の主体形成の視点から—」『社会とマネジメント』6(1)、2008年9月、1-19頁。
- 4 鈴木賢一「だがねランドで学ぶまちづくりリテラシー—名古屋の子どものまち学習の拠点を目指して—」『アーバン・アドバンス』名古屋都市センター(45)、2008年2月、40-47頁。
- 5 鈴木賢一「まちづくりリテラシーを育む「だがねランド」」『地域問題研究』(80)、2011年2月、2-10頁。
- 6 内藤裕子「ワールドレポート—ヨーロッパ(1)政治と経済と文化を学ぶ「ミニミュンヘン」(1)遊びながら都市の経済を学ぶ」『学校経営』47(12)、2002年10月、78-82頁。
- 7 内藤裕子「ワールドレポート—ヨーロッパ(1)政治と経済と文化を学ぶ「ミニミュンヘン」(2)遊びながら文化と芸術を体験する」『学校経営』47(13)、2002年11月、62-66頁。
- 8 内藤裕子「ワールドレポート—ヨーロッパ(2)政治と経済と文化を学ぶ「ミニミュンヘン」(3)遊びながら政治を体験する」『学校経営』47(14)、2002年12月、82-87頁。
- 9 卯月盛夫「ミニ・ミュンヘンと遊びの権利」『子どもの権利研究』(10)、2007年2月、28-32頁。
- 10 ミニ・ミュンヘン研究会（代表・卯月盛夫）編『ミニ・ミュンヘン—子どもがつくる、もうひとつの都市』（DVD + 資料編ブックレット）萌文社、2005年。
- 11 ミニ・ミュンヘン研究会（代表・卯月盛夫）編『ミニ・ミュンヘン—die alternative Stadt もうひとつの都市—ver.2』（DVD + 資料編ブックレット）萌文社、2010年。
- 12 山崎古都子「住教育研究の現在の到達点」『滋賀大学教育学部紀要』人文科学・社会科学・教育科学No.40、1990年、199-214頁。
- 13 関西家政学原論研究会『家政学のじかん』2011年、80頁。
- 14 山崎、前掲論文、1990年。
- 15 妹尾理子『住環境リテラシーを育む』萌文社、2006年。

- 16 住宅総合財団研究所ホームページ (<http://www.jusoken.or.jp/diffuse/index.html>) (2012年6月23日取得)
- 17 妹尾理子、前掲書、2006年。
- 18 財団法人 住宅総合研究財団 住教育委員会編『屋根のない学校—対話共生型住まい・まち学習のすすめ』萌文社、2009年。
- 19 住まい・まちづくり学習研究会編『地域の住まい学習』ドメス出版、2007年。
- 20 財団法人 住宅総合研究財団 住教育委員会編『これからの環境学習 まちはこどものワ
ンダーランド』風土社、1998年。
- 21 妹尾理子、前掲書、2006年。
- 22 グラハム・パイク他著『地球市民を育む学習』明石書店、1997年。
- 23 中山あおい他著『シティズンシップへの教育』新曜社、2010年。
- 24 林初海『『郷土』としての台湾』東信堂、2009年。
- 25 山崎、前掲論文、1990年。
- 26 文部省「教育指標の国際比較」2012年3月 ([http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/
data/kokusai/_icsFiles/afieldfile/2013/02/05/1318687_3_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/kokusai/_icsFiles/afieldfile/2013/02/05/1318687_3_1.pdf)) (2012年10月取得)
- 27 国立教育政策研究所「第3期科学技術基本計画のフォローアップ『理数教育部分』に
係る調査研究 報告書」2009年3月 ([http://www.nier.go.jp/seika_kaihatsu_2/risu-2-
200_seido.pdf](http://www.nier.go.jp/seika_kaihatsu_2/risu-2-200_seido.pdf)) (2012年10月取得)
- 28 川崎衿子「ドイツ家政学における住居学の系譜」『研究紀要』40、1996年、21-29頁。
- 29 諸岡浩子、山本奈美、福田公子「家庭に関する専門学科における「日本版デュアルシ
ステム」の検討(第1報):ドイツの実情とわが国の現状」『くらしき作陽大学・作陽短
期大学研究紀要』39(1)、2006年、43-57頁。
- 30 舟越耿一「ドイツNRW州の『政治教育』」『教育実践総合センター紀要』1、2002
年、14-20頁。
- 31 近藤孝弘「ドイツにおける若者の政治教育—民主主義社会の教育的基盤—」『学術の
動向』14(10)、2009年、10-21頁。
- 32 ミュンヘン市のこどもフォーラムの視察に関する記録
<http://hatakenakatomo.co.seesaa.net/article/241878921.html> (2012年4月23日取得)
<http://hatakenakatomo.co.seesaa.net/article/237982447.html> (2012年4月23日取得)
- 33 木下勇『『都市計画と公共の福祉』に関する『子どもの参画』と『場所の感覚』から
の考察』、千葉大学公共研究センター21世紀COEプログラム「持続可能な福祉社会に
向けた公共研究拠点」、『公共研究』4(1)、2007年、135-157頁。